

氏名	くに かつ えい じ 國 方 栄 二
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 480 号
学位授与の日付	平 成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	プ ラ ト ン の ミ ュ ー ト ス

論文調査委員 (主 査)
教 授 内 山 勝 利 助 教 授 中 畑 正 志 教 授 中 務 哲 郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、プラトンのミュートスについて正しい理解を得るために、まずプラトン以前においてミュートスがどのように語られたかを調査し、これとプラトンのミュートスを比較した上で、プラトンがミュートスにどのような新しい意味をあたえたかを明らかにしようとするものである。全体はミュートス概念の変遷を解明した第一部と、プラトンのミュートスを直接論じた第二部からなる。

第一部では、まず神話と哲学について、特に従来一般に語られてきた「神話から哲学へ」という図式への批判を軸にして、再検討される(第一章)。その上で、プラトン以前におけるミュートスとロゴスの語の使用について、ホメロス以来のギリシア文学・思想文献に即して調査し(第二章)、さらに、プラトン以前におけるミュートスをもつ真理性について考察する(第三章)。

論者は、主要な古典出典の精緻な分析を踏まえて、以下のような結果を導出している。

(1) われわれはロゴスという言葉で論理や理性を、ミュートスという言葉で神話や物語を予想するのが普通であるが、そういったわれわれの通念とは異なり、両者は初期のギリシア文学の中で一度として対比的に用いられたことはない。ホメロスにおいては、ミュートスの使用がロゴスを数の上で圧倒しているという点を除くと、両者はともに言葉、話の意味で、特にロゴスのほうに合理性の意味を確認することはできない。むしろ、「ロゴスで心を惑わす」といった否定的な意味合いで用いられていることが注目される。この点はヘシオドスでも同様で、ロゴスは「空言」「虚言」といった悪い意味合いで使用されている。このようにロゴスとミュートスとは、通常考えられているのとは逆に、ロゴスのほうがその意味において否定的である。ロゴスが積極的に合理性の意味をもつようになったのは、初期の哲学者たちの功績である。

(2) ミュートスの特徴は、正しい記憶とそれによって保証される真実とに深く結びついているところにある。一言で言えば、ミュートスとは「記憶されるべきもの」であり、記憶によって伝達される事実であった。それに対して、後発のロゴスは、初期哲学者たちが言説を客体化し抽象化することで、通常の認識を越えたものをこれによって認識できると主張したもので、これは事実を越えた、そして事実を根拠をあたえる真理である。

(3) ギリシア語のアレーティア(真実)に関する調査は、今述べたことを裏づける意図をもっている。ホメロスにおいてアレーティアが出現する場面の多くは、報告者がある事実について別の人に伝達するという場面で用いられ、伝達経路に誤りがなければ、語られることはアレーティアであると言われる。これは、同様に真実を意味するエテュモスあるいはその同属語が事実の客観性にのみに関わる言葉であるのと対照的である。エテュモスやネーメルティア(誤りなきこと)という真実を表していた言葉は次第に使われなくなり、その結果アレーティアはそれらの語の意味をも包摂するようになり、それとともにアレーティアの語義も拡大する。

(4) ヘシオドス『神統記』27-28行は、従来は誤ってムーサがもっともらしい作り事ではなく、真実を語るという、真理宣言の意味に解釈されてきたが、この箇所では注目すべきはむしろ「真実に似た虚偽」という表現である。この言葉は、ホメロスにおいては真実を正しく伝達すること以上のものではなかったが、ヘシオドスでは「真実に似た虚偽」がムーサの

権能のひとつに数え上げられることで、ミュートスはまことしやかに虚偽を語るという意味をもつにいたった。ただし、それは否定的な意味のものではなく、むしろ語り手の熟達した技を指すことばある。プラトンの詩人批判はこの点にかかわっているが、彼は、ホメロスやヘシオドスを虚偽を語る詩人として非難したわけではなく、彼らのミュートスが神の本性を正しく伝えていないので、その意味で真実に似ない虚偽として、これを追放したのである。

第二部では、まず古来のプラトン理解において、彼のミュートスがどのように位置づけられ、どのように解釈されてきたかを概観し（第一章）、次いで、プラトンの著作における「ミュートス」の用法とそれへの言及に即して、プラトンにおけるその語義、その定義を究明し、さらに諸家の分析を援用しつつ、プラトンの著作に組み入れられた多数のミュートスの分類整理と、それらの概観的な取りまとめを行っている（第二章）。

これらを通じて、論者は、プラトンにおけるミュートスの本性と特質を析出する。特に『国家』第4巻においてミュートスを規定している個所に深い考察を加え、重要な二つの論点を提出している。一つは、ミュートスは、語られる事柄が事実であるかないかをわれわれが知ること（ヴェリフィケーション）のできないことを対象とすること、もう一つは、ミュートスがすぐれたものであるためには、語られる対象に関する真実（『国家』の例では、神々についての真実）を正しく伝えるものでなければならない、ということである。論者はここに、初期ギリシア文学におけるミュートスとの根本的な相違点を見いだす。すなわち、プラトンにとってもミュートスの事実性は重要ではあるが、しかしそれはむしろ直接的な事実性の確定が困難な事柄にかかわり、しかもより重要なことは、それが「真実に似ているか否か」にある。ここで古来の「真実に似た虚偽」は新たな意味が与えられ、もっともらしい非事実から、むしろ語られる事柄の真実を正しく語っているか、文字通り「真実に似た」虚偽であるか否かが、眼目とされるのである。

以上のような考察を経て、つづく第三章、第四章で、プラトンのミュートスのうち、最も主要な主題にかかわるいくつか、的確な叙述を展開しながら、具体的に検討される。

第三章では、『ゴルギアス』『パイドン』『国家』に登場する、死後の魂の運命に関するミュートスが叙述・分析される。そのさい、論者が中心軸にすえる問題は、これらの著作において、なぜソクラテスは宗教的な教説—それはたいてい不確かな内容のものである—を借りてまで、魂の死後待ち受けているとされる裁き、刑罰、そしてさらなる転生について語る必要があったのか、ということである。論者によれば、この問題を考える上でヒントとなるものは、ミュートスの前後に語られた言葉にある。すなわち、ソクラテスの問答は「どことなく人を肯かせるところがあるような気もする。けれども、わたしの結局的な気持ちといえば、……あなたの言葉にすっかり承服することはできないのだ」という『ゴルギアス』（513C）のカリクレスの言葉は、論理では納得しても、情念ではまだ説得されないままであるということを語っている。『パイドン』では、魂は身体から離れる（すなわち死ぬ）と、風がものを吹き飛ばすように、吹き飛ばされてしまうのではないかと、死を恐れる子供のようにソクラテスにからかわれると、ケベスは死を必要がないのだということを説得してくれと懇願した（77D-E）。むしろその説得は、これに続く問答法的議論を指しているが、最後のミュートスをも含んでいることは明らかである。ソクラテスはミュートスを終えるにあたって、このミュートスがそっくりそのまま事実だとするのは賢明な者の考えることではないが、このようなことを考えるのは適切なことであり、これに賭けるだけの価値もあると思うと言う。問答法的議論ももちろん人を説得する。それはひとに有無を言わせぬ強制力をもつが、ひとはそれによって完全には説得されないことは、カリクレスの例を見ても分かる。そのうえさらに、ミュートスによって説得される必要がある。それは「鉄と鋼の論理」（『ゴルギアス』509A）とは異なる、もっとしなやかな、それでいてひとの情念に訴えかけてくる説得である。ミュートスはこのような説得を目指すとともに、問答法的議論（ロゴス）を補完するものである。

第四章では、後期作品の『政治家』『ティマイオス』『クリティアス』に登場する、宇宙と人類史のミュートスが扱われている。『政治家』のミュートスでは、宇宙が神の手によって直接導かれて運行していく時期と、神が手を放し、それによって宇宙が逆向きに回転運動していく時期の、二つの周期（すなわち、クロノスの時代とゼウスの時代）が交互に続くことで宇宙が進行していくという、途方もないミュートスが語られる。このミュートスは、クロノス時代を理想郷として、今の時代はゼウス時代であり、苦悩に満ちた世であるといったふうに読まれてきたが、論者は、これではプラトンがなぜ二つの時代について語ったのか、またこのミュートスが作品全体とどのように関連するのかについて十分に説明することができないとして、プラトンの関心がクロノスの時代にはほとんどなく、クロノス時代というのは、現代のゼウス時代を正しく見すえ

るための引き立て役でしかないという解釈を提示する。現代は宇宙が、そして当然人間も、何事につけても自分で対処していかねばならない辛い時代ではあるが、完全に神の支配から離れてしまったのではなく、思慮（プロネーシス）を受けられることによって間接的に神によってなお支配された時代である。したがって、あたえられた思慮に従って生きること、これを遵守していくことが宇宙にとっても人間にとっても最善のありかたであることになる、というのが論者によるこのミュートの読解である。論者はまた、そこに自然史と人類史の必然的な決定論の拒否をも見てとる。すなわち、人類史はやがて墮落に至る歴史であるが、これはむしろ人間が宇宙と同様に身体を有することから結果するものであるが、プラトンは一貫して悪の原因が神にはないことを強調しながら、同時に物体（身体）的要素を墮落の直接原因とはしていない。宇宙の回転運動の原因が魂にあるように、宇宙が、そして人間がすぐれたものになるか否かは、魂のありかたで決まる。むしろ宇宙の逆回転を宇宙の（もちろん人間も）力によって止めることはできない。それは文字通り必然である。しかしそれでも、プラトンによれば、宇宙の、人間の生きかたは完全に必然的には決定されてはいないのである。

『ティマイオス』『クリティアス』で語られているのは、論者によれば、神と不合理性との闘争の歴史である。神は不合理性に対して優位に立つが、絶対的に優位なのではなく、両者の関係は「知性がアナンケーを説得する」という表現からも窺われるように、それ自身が善きものである工作者（神）は世界をその可能なかぎり善いものにするが、完全に善がこの世を支配することはない。しかし論者は、むしろそこに人間の自由の可能性を認める。すなわち、宇宙のもつ思考の働きと周期（秩序ある天体運動）を学んでみずからを矯正することで人間の本来の姿に戻すこと、これが哲学（知を愛する）であり、これによって最善の生（幸福）が得られると考えるのである。またこれに続く『クリティアス』では、理想国家を現実のものとしてもつ人類史が語られるが、論者の注目するのは、人類史において知性は絶対的に優位にあるのではなく、神の完全な支配のもとに進行するのではないということである。この作品において、アトランティスも古アテナイもともに滅びる（アトランティスの滅亡は、『政治家』のミュートを連想させる）。当初は神の掟に従っていたアトランティス人は、はじめは思慮（プロネーシス）が彼らを支配していたから、莫大な富の重みに耐えていたが、神の性が死すべきもの（むしろこれは物体的要素を暗示する）との度重なる混合によって割合が減じ、人間の性が優位となって墮落が始まる。つまりアトランティスは道徳的退廃ゆえに滅んだ。しかし、ここにおいても人間の歴史が善から悪へと必然的に下降すると考えられているのではない、と論者は指摘する。プラトンは自然学的な決定論とも、歴史学的な歴史主義とも無縁であり、そのことは、古アテナイにはアトランティス人のような欠陥はないにもかかわらず、ある日突然大地に呑み込まれてしまう経緯にも象徴的に示されている。このような国家の消滅は、興亡を繰り返す人類史のひとつまであり、モラルを超えた原因によるものであることを、プラトンは壮大なミュートスによって語ろうとしているのである。

これらの具体的叙述に明瞭に見てとられるように、プラトンのミュートスとは、ロゴスの及ばない事柄について「真実に似た虚偽」の力を駆使することによって、可能なかぎりその「真実」をわれわれに伝えようとしたものである、と論者は結論する。

論文審査の結果の要旨

プラトンは、多くの著作において、哲学的な議論の結末に、またときには中途に、ミュートス（神話・物語）を置いて、当の議論の補完や発展を試みている。本論文は、まさにプラトンにおいてはじめてミュートスが、哲学的な議論（ロゴス）との対比において、神話・物語として確定された過程をホメロス以来の古代文献を通じて辿るとともに、プラトンにおけるミュートスの意義と役割を、主要な事例に即して具体的に考察することを課題としたものである。論文はミュートス概念の変遷を解明した第一部と、プラトンのミュートスを直接論じた第二部からなる。

第一部ではミュートスとロゴスの対置を軸として、それらとアレーテイア（真理）概念との呼応関係に注目することで、「ミュートスからロゴスへ」の発展の図式の内実が再検討される。ホメロス、ヘシオドスをはじめ、悲劇、歴史書、初期哲学断片などにわたって用例を博搜した作業は、それ自体として大きな成果となっている。のみならず、プラトン以前においてはもっぱら「ミュートス」が言論的なもののほぼ全体をカバーし、「ロゴス」は限定的にしか用いられなかったことを指摘した上で、2点の特記すべき調査結果を導出している。その一つは、ミュートスが記憶の伝達と伝承を通じて事実を語り伝えることを基本性格とし、そのかぎりにおいて真実を含んでいると考えられるべきものであるのに対して、初期哲学の中

でやや顕著になりはじめたロゴスは、特殊的には事実を越えて、むしろその根拠にかかわる真実・真理を目指した言論の領域を意味するようになることを明らかにしたことである。もう一点は、アレーテア（真実・真理）の用法についての精査で、論者は、それが本来話者の体験した出来事を報告する場合の事実性について用いられたことを明らかにし、その語源は「忘却（レーテー）」の否定形に求められる（たとえば、ハイデガーが強調したような「隠れなさ」ではなくて）べきことへの一つの証拠を提示していることである。むしろその結果は、先に論じた「ミュートス」の記憶性とそれに固有の「真実」とも連動したものである。さらに論者は、以上の確認を踏まえて、プラトン以前のミュートスの言論においては、たとえばヘシオドスに典型的に見られるように、「真実に似た虚構」とは事実を文学的な技巧によってまことしやかに見せかけたものという意味が中心をなしていることを指摘する。プラトンにおいては、その意味内容に大きな変化が生じ、ミュートスの機能も変容することになる。

第二部では、まずプラトンのミュートスの特質が、第一部の帰結との対比のもとに、概括される。論者の主要な指摘は二点にまとめられよう。第一には、ミュートスは、その内容が真実であるか否かを知りえないような事柄（たとえば神の本性或死後の世界など）を対象とする、ということである。第二には、ミュートスがすぐれたものであるためには、語られる対象に関する真実を正しく伝えるものでなければならない、とされることである。したがって、「真実に似た虚構」は、プラトンにおいては、極力真実に似たもの、正しい真実を伝えるものであるかぎりにおいて評価されるべきであることになる。論者はまた、これにもとづいて、プラトンの文藝批判の本来の意図をも適切に理解できることを指摘している。いずれも論者の創見として、プラトンのミュートスの本質を的確に取り押さえたものと評価することができる。

以上の理論的考察につづいて、プラトンのミュートスのうち、主要な二つのジャンルについて、具体的な内容の要点整理とともに、各著作全体との有機的連関の分析が加えられる。その一つは、『ゴルギアス』『パイドン』『国家』に語られている、魂の死後の運命についてのミュートスである。論者によれば、ここではとりわけ問答法的議論（ロゴス）と論理によっては説得困難な事柄について、ミュートスの機能を駆使しながら、事実そのものではなくともそう考えるのが適切かつ有意義な想定を、よりしなやかに情念に訴える説得によって、ロゴスを補完するものである、としている。着目されているもう一つの主題は、『政治家』『ティマイオス』『クリティアス』に見られる宇宙と人類史のミュートスである。論者は、これらを通じてプラトンが宇宙と人間のあり方を貫いている神的知性のはたらきを明瞭に示すとともに、宇宙史も人類史もけっして必然的な決定論に支配されたものとはしていないことを、神話的諸要素の分析によって明らかにしている。いずれもプラトンの意味での「真実に似た虚構」としてのミュートスという論者の規定によく合致することを示している。その点とともに評価されているのは、論者による個別的なミュートスの解明である。たとえば、『政治家』に語られている宇宙の周期的逆転のミュートスについて、従来は、神が周転を操る「クロノスの時代」を理想的時期、神の手を離れて逆周転する「ゼウスの時代」を混乱期とする解釈が一般的であったが、論者はプラトンの関心が後者であって、このような時代（すなわち現代）にこそ、われわれ人間は自律的に、しかし神から授けられた思慮と知性によって生きることの必要性を明示したものと、とする新解釈を提出している。こうした、すぐれたミュートス理解は、他にも例示することができる。

とはいえ、プラトンのミュートスは以上に尽くされるものではない。さらに、同様にプラトンにおいて多用されているアレグリーヤアナロジーとの峻別や機能の異同等、さらに論ずるべき事柄は少なくない。また、第一部の議論についても、さらなる補強が求められる点が残されている。しかし、それらは、今後継続されるべき課題であり、本論文はそれ自体としてすぐれた価値を有するものである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2005年1月25日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。